

榛原町内遺跡発掘調査概要報告書 2004年度

榛原町文化財調査概要 29

2006

宇陀市教育委員会

榛原町内遺跡発掘調査概要報告書 **2004年度**

榛原町文化財調査概要 29

2006

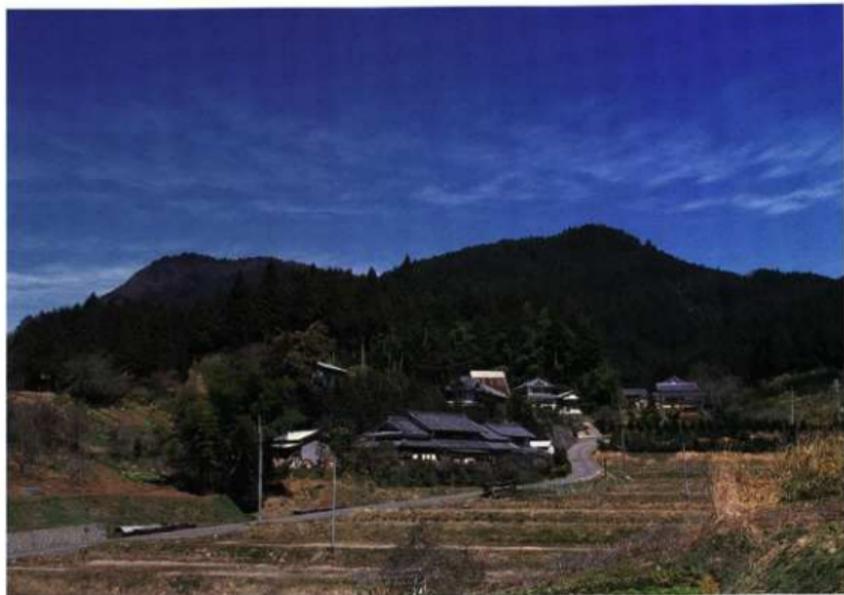
宇陀市教育委員会



航空写真 (南西上空)



航空写真 (西上空)



伊那佐山と澤城跡（南から）



第1地点検出遺構（北から）

例 言

- 1 本書は、平成16（2004）年度に榛原町教育委員会が国庫補助事業・県費補助事業として実施した「榛原町内遺跡」の発掘調査概要報告書（榛原町文化財調査概要 29）である。
- 2 発掘調査（現地作業・整理作業）は、平成16（2004）年4月12日に着手し、平成17（2005）年3月31日に終了した。なお、本書の刊行は、平成17（2005）年度事業として実施したものである。
- 3 平成18（2006）年1月1日で榛原町、大字陀町、菟田野町、室生村が合併して宇陀市となったが、従来の業務を引き続いて行っており、本書には、「榛原町内遺跡」の調査成果の一部を収録している。
- 4 現地調査は、奈良県教育委員会及び奈良県立橿原考古学研究所の指導のもと、榛原町教育委員会生涯学習課（現 宇陀市教育委員会社会教育課）主任 柳澤一宏が担当した。
- 5 調査組織及び関係者は、「I 埋蔵文化財発掘調査の概要」に掲載している。
- 6 測量図及び遺構図の方位は、国土座標第VI系を基準とする座標北を用いているが、一部には磁北（M、N）も使用している。なお、平成14年4月1日施行の測量法改正により、測量の基準が日本測地系から世界測地系になっているが、本書では、これまでの遺跡測量成果等の都合上、日本測地系によっている。
- 7 土層の色調は、『新版標準土色帖』2000年版（農林水産省農林水産技術会議事務局監修（財）日本色彩研究所色票監修）を参考にしている。
- 8 各遺跡の調査記録、出土遺物等は、宇陀市教育委員会において保管している。
- 9 本書の執筆・編集は柳澤が行った。

目 次

I	埋蔵文化財発掘調査の概要	1
1	埋蔵文化財発掘調査等の概要	
2	調査組織等	
II	位置と環境	8
1	地理的環境	
2	歴史的環境	
III	下城・馬場遺跡第10次発掘調査概要	10
1	調査の契機と経過	
2	位置と環境	
3	遺跡の調査	
4	まとめ	
5	抄録	
IV	丹切遺跡第11次発掘調査概要	16
1	調査の契機と経過	
2	位置と環境	
3	遺跡の調査	
4	まとめ	
5	抄録	
V	絵牧市場西垣内遺跡第2次発掘調査概要	20
1	調査の契機と経過	
2	位置と環境	
3	遺跡の調査	
4	まとめ	
5	抄録	
VI	澤城跡第2次発掘調査概要	24
1	調査の契機と経過	
2	位置と環境	
3	遺跡の調査	
4	まとめ	
5	抄録	

報告書抄録

I 埋蔵文化財発掘調査の概要

1 埋蔵文化財発掘調査等の概要

榛原町では、1968（昭和43）年以降、土木工事等の開発行為に伴い、生活環境をはじめ、地理的環境・歴史的環境も大きく変化してきている。土木工事等の開発行為の増加とともに埋蔵文化財の発掘調査も町内各所で行われ、周辺の山野とともに大きく景観を変え、その姿を消している。

このような状況のもと、榛原町教育委員会では、1986年に町内遺跡の遺跡詳細分布調査を実施し、いわゆる「遺跡分布地図」の整備をはかり、『榛原町遺跡分布調査概報』を刊行した。その後、新たな調査成果等をもとに、1993年には『榛原町遺跡分布地図』を刊行し、「遺跡分布地図」の改訂、2000年には「遺跡分布地図」の改訂並びにデジタル化を行い、埋蔵文化財の保存・活用をはかっていく基礎資料としている。

毎年、町内各所で開発行為が計画・実施されており、埋蔵文化財の取り扱い等については、「遺跡分布地図」をもとに事業者等とその都度、協議を重ねているところである。

2004（平成16）年度に榛原町教育委員会が取り扱った遺跡有無確認踏査願、埋蔵文化財発掘届・通知、発掘調査等の件数は表1のとおりである。また、2004（平成16）年度に実施した発掘調査・工事立会は表2・図1のとおりである。なお、本書には、国庫補助事業・県費補助事業として実施した事業のうち、下城・馬場遺跡（10次調査）、丹切遺跡（11次調査）、検牧市場西垣内遺跡（2次調査）、澤城跡（2次調査）の発掘調査概要を取録している。下城・馬場遺跡と澤城跡については、調査成果が整理途上にあるため、その一部を掲載しているにすぎない。

例言にも記したが、2006（平成18）年1月1日で榛原町、大字陀町、菟田野町、室生村が合併して宇陀市となったため、2005（平成17）年12月31日までに榛原町教育委員会が取り扱った遺跡有無確認踏査願、埋蔵文化財発掘届・通知、発掘調査等の件数（表3）、発掘調査・工事立会の概要（表4、図2）もあわせて掲載しておく。

表1 2004（平成16）年度発掘届・発掘調査件数等一覧表

遺跡有無確認踏査願	埋蔵文化財発掘届（民間）	埋蔵文化財発掘通知（公共）	埋蔵文化財発掘届・通知合計	発掘調査（町担当）	工事立会（町担当）	調査件数合計
0	3	0	3	4	0	4

種別	概要	遺跡名	所在地	調査原因	事業主体	工事面積(m ²)	措置等
埋蔵文化財発掘届（民間）		検牧市場西垣内遺跡	検牧2384	個人住宅建設工事	伊藤芳浩	277.1	2004年 榛原町発掘調査
		丹切遺跡	萩原 元萩原442、450	個人住宅建設工事	日高 崇	291.8	2004年 榛原町発掘調査
		未定	福地642番地1	集合住宅建設工事	東建コーポレーション(株)	484.0	2005年 榛原町工事立会

表2 2004(平成16)年度発掘調査等一覧表

番号	調査種別	発掘調査地区図番号 発掘調査地区図番号	遺跡名	調査地	現地 調査期間	調査原因 (原因者)	工事 面積 (㎡)	調査 面積 (㎡)	調査 概要		遺跡概要	備考
									遺構	調査 遺物		
1	発掘調査	2-524 15-D-79	澤地跡 (2次調査)	樺原町大員 302、303	2004.3.10 ~ 2004.3.31 2005.8.1 2005.8.10	総面積調査 (障子面)	-	154	礎石建物、土坑、土塊、土 ラット	サマカイト、土師器、瓦質土器、 陶器、磁器、青磁、白磁、大形 土製品、瓦、鉄刀子、鉄釘、鉄 滓、銅製目録金具、銅製金具、 鉄貨、ガラス、ガラス滓、磁石、 陶片転用磁石、磁石、磁土器 <整理箱 4箱>	中世の城跡	昨年度調査の継続 遺物は、昨年既出 土分を含む
2	発掘調査	2-546 15-D-90	下城・長寿遺跡 (10次調査)	樺原町沢原 1286	2004.7.12 2004.12.28 2005.3.12 2005.3.29	個人の農地 改良工事 (築込盛付)	1,117	131	礎、土器、瓦 磁土	サマカイト、陶文土器、須恵器、 土師器、瓦器、瓦質土器、陶器、 磁器、青磁、白磁、磁釘、鉄滓、 磁石、磁貨、瓦、磁土器 <整理箱 9箱>	縄文時代~古墳時 代・中世の遺物散 布地 中世の居館跡	
3	発掘調査	1-98 15-B-8	丹切遺跡 (11次調査)	樺原町松原 元松原 442、450	2004.11.4	個人住宅 建設工事 (日高築)	297.8	8	なし	なし	縄文時代~中世の 遺物散布地	
4	発掘調査	2-625 15-B-555	松牧市場 西区内遺跡 (2次調査)	樺原町松牧 2384	2004.12.21 ~ 2004.12.27	個人住宅 建設工事 (伊藤芳治)	277.1	7	なし	なし	弥生時代~古墳時 代・中世の遺物散 布地	



図1 2004（平成16）年度 調査遺跡位置図

表3 2005(平成17)年度発掘調査・発掘調査件数等一覧表

種別	埋蔵文化財発掘調査(民間)			埋蔵文化財発掘調査(公社)			発掘調査(町担当)			工事立会(町担当)			調査件数合計
	0	3	0	3	3	2	2	5					
概要	調査内容												
発掘調査	延命寺遺跡	所在 地	調査原因	事業主体	工事面積 (㎡)	積置 等							
	松牧高倉遺跡	松牧2159	個人住宅建設工事	横山 武	690.82	2005年横原町立会調査							
	未定	上井足2086、2087	無縁中継所建設工事	株NTTドコモ関西	47.0	2005年横原町発掘調査							
					103.87	2006年宇陀市工事立会							

表4 2005(平成17)年度発掘調査等一覧表

番号	調査種別	発掘調査地番号 ・ 発掘調査地番号	遺跡名	調査地	調査期間	調査原因 (発掘者)	調査面積 (㎡)	調査回数	調査概要		遺跡概要	備考
									遺跡	遺物		
1	発掘調査	未登録(発見遺跡) ・ 未登録(発見遺跡)	松牧高倉遺跡 (1次調査)	横原町松牧 2159	2005.6.8 ～ 2005.7.7	個人の宅構 造成工事 (山本国康)	47	3.7	なし	石鏡、須恵器、瓦器、土師器、 陶器、磁器、鉄釘 <整理箱 2箱>	縄文時代、古墳時 代、中世、近世の 遺物散布地	
2	発掘調査	2-524 ・ 15-D-79	海城跡 (2次調査)	横原町大貝 302、303	2005.8.1 ～ 2005.8.10	親類縁者調査 (横原町)	-	154	62	燧石遺物、集 石、ピット	中世の城跡	2次調査埋め戻し 作業 遺物は、15・16年 度出土分を含む
3	発掘調査	2-546 ・ 15-D-90	下城・馬場遺跡 (11次調査)	横原町沢 1296	2005.7.21 ～ 2005.8.10	個人の宅構 改良工事 (坂出善信)	1,117	62	3	須恵器、土師器、瓦器、瓦葺土 器、磁器、青磁、白磁、大形 陶器、磁器、鉄釘、鉄釘、鉄 釘、銅製日置金具、銅製金具、 銅貨、ガラス、ガラス片、磁石、 陶片転用磁石、磁石、黒土 器 <整理箱 4箱>	縄文時代～古墳時 代、中世の遺物散 布地	9次調査埋め戻し 作業 遺物は、15・16年 度出土分を含む
4	立会調査	1-31 ・ 12-D-33	未定	横原町福地 642.1	調査中	共同住宅 建設工事 (東建コーポ レーション)	484	3	なし	瓦器、土師器 <整理箱 1袋>	中世の居館跡 遺物散布地	
5	工事立会	2-545 ・ 15-D-215	延命寺遺跡	横原町沢 783	2005.7.7	個人の住宅 建設工事 (横山 武)	690.82	-	なし	土師器 <1袋>	弥生時代の集落跡 弥生時代、古墳時 代、中世の遺物散 布地	



図2 2005（平成17）年度 調査遺跡位置図

2 調査組織等

2004年度の現地調査及び2005年度の整理作業等の関係者は、次のとおりである（敬称略）。

2005（平成17）年12月31日まで

事業主体 榛原町教育委員会
総括 教育長 田村義治
庶務 事務局長 小西千恵
生涯学習課
課長 中村好三（次長生涯学習課長事務取扱）
課長補佐 合田憲二
主事 杉本昌之
調査 主任 柳澤一宏

2006（平成18）年1月1日から

事業主体 宇陀市教育委員会
総括 教育長 岸岡寛式
庶務 事務局長 中田 進
社会教育課
課長 中井富一
課長補佐 藤本都志枝
調査 主任 柳澤一宏

下城・馬場遺跡（10次調査）

補助員 井上好美、横澤慈、鷹野義朗、峯健太郎、川田晶一、打越真弓、松本千恵、筒井郁子、松浪智美、山崎充代、太田保美、石井良憲、前田渉、松元章徳
作業員 権原栄子、大門建夫、大門静、芝田キヨ子、古川マサエ
指導・助言 奈良県教育委員会、奈良県立権原考古学研究所、辻本宗久
協力 砥出嘉信、沢自治会、(株)ワールド、IDA

丹切遺跡（11次調査）

補助員 井上好美、川田晶一
指導・助言 奈良県教育委員会、奈良県立権原考古学研究所
協力 日高崇

桧牧市場西垣内遺跡（2次調査）

補助員 川田晶一
指導・助言 奈良県教育委員会、奈良県立権原考古学研究所
協力 伊藤芳浩

澤城跡（2次調査）

補助員 井上好美、横澤慈、鷹野義朗、峯健太郎、竹政俊和、川田晶一、打越真弓、松本千
恵、筒井郁子、松浪智美、山崎充代、太田保美、石井良憲、前田渉、松元章徳

作業員 権原栄子、大門健夫、大門静、芝田キヨ子、古川マサエ

指導・助言 奈良県教育委員会、奈良県立権原考古学研究所

協力 山口寛、山口武、窪田正治、河内一浩、㈱ワールド

II 位置と環境

1 地理的環境

奈良盆地の東方の山間部に宇陀と呼ばれている地域が広がっており(図3)、現在の行政区画では大宇陀町、榛原町、菟田野町、室生村、曾爾村、御杖村からなっている。この宇陀地方は地理的な状況から西半と東半に大別でき、一般に前者が「口宇陀」、後者が「奥宇陀」とも総称されている。口宇陀は標高300~400mの丘陵とこの間を縫って流れる中小河川が複雑に入り乱れ、これらが幾つもの小盆地や浅い谷地形を形成しており、口宇陀盆地とも呼ばれ、大宇陀町、榛原町、菟田野町の大半がここに含まれている。これに対し、東部の奥宇陀は室生山地、高見山系などの険しい山々が連なっており、奥宇陀山地とも呼称されている。口宇陀地域の主要河川は、西に宇陀川、東に芳野川があり、幾つもの小河川を合わせながら榛原町萩原で宇陀川本流となる。榛原町を後にした宇陀川は三重県で名張川となり、木津川、淀川を経て遠く大阪湾へと至り、大和川流域とは水系を異にしている。

榛原町の四周は概ね標高約400~800mの山塊に囲まれ、東は高城岳、三郎岳、室生村へと通じる石割峠があり、北は大和高原とをわける額井岳、香酔山、鳥見山などの山々が屏風状に連なり、宇陀の地を見下ろしている。西は桜井市や大宇陀町、南は菟田野町となっており、丘陵後線をもってそれぞれの境界としている。地形的にみれば榛原町の西半は口宇陀的、東半は奥宇陀的な様相を呈している(図1)。



図3 榛原町位置図

2 歴史的環境

宇陀地方は、「古事記」、「日本書紀」をはじめとする多くの文献に度々登場し、これらの内容等からこの地は軍事・交通の要衝であったことを窺い知ることができ、今に残る地名や伝承なども多い。また、榛原町を流れる宇陀川・芳野川・内牧川流域の各所には多くの遺跡が分布しており、発掘調査・分布調査を重ねるたびにその数も増加している。

これまでに、宇陀郡内では4点の有舌尖頭器が出土しており、うち、3点が町内から出土していることが明らかとなっている。これらは、縄文時代草創期に求めることができ、この頃が宇陀地域の歴史の初源であろう。

縄文時代の遺跡の多くは、先述の河川流域の河岸段丘上、尾根上、谷部等に認められる。これらの遺跡の多くは、採集遺物によっているため、その実態が必ずしも明らかとはいえない。また、発掘調査によって確認された場合でも、数点の遺物が出土しているのみで遺跡の全容が明らかになったもの

は少ない。このような状況のもと高井遺跡や坊ノ浦遺跡では、早期から後期にわたる集落跡であることが発掘調査によって明らかとなっている。

弥生時代前期から中期の遺跡は、沢遺跡、下城・馬場遺跡、大貝ヒジキ山遺跡、上井足北出遺跡をはじめとする数遺跡が知られているにすぎないが、後期の遺跡は比較的多く認められる。これらは、地理的制約のためか奈良盆地で見られるような大規模な集落ではないが、次代の古墳時代へと継続するものが多い。

弥生時代後期から古墳時代前期の墳墓である台状墓は、これまでに野山遺跡群、能峠遺跡群、下井足遺跡群、大王山遺跡群、キトラ遺跡などで確認されている。弥生時代後期の集落としては、高塚遺跡、能峠中島遺跡、上井足北出遺跡、古墳時代の集落としては、先の遺跡の他、戸石・辰巳前遺跡、高田垣内遺跡、谷遺跡、石榴垣内遺跡、坊ノ浦遺跡などを挙げることができ、谷部を流れる川跡や壑穴住居跡などが確認されている。

古墳時代前期の古墳は谷畑古墳、中期の古墳としては高山1号墳、シメン坂1号墳、前山1号墳などが発掘調査によって明らかにされている。後期となると古墳数は著しく増加し、ある程度の粗密があるものの、町内各所の屋根上には数基から十数基単位で分布している。5世紀後半から盛期を迎える古墳群は野山古墳群、沢古墳群、栗谷古墳群、大王山古墳群、丹切古墳群などが知られている。6世紀後半以降、今までの木棺直葬墳にかわって横穴式石室墳が築造されるようになり、丹切古墳群、能峠古墳群、石田古墳群、大貝古墳群、西谷古墳群をはじめ、多くの古墳が発掘調査によって状況が明らかになっている。

横穴式石室にかわる新しい葬法として火葬墓が登場してくるが、最も代表的なものが、壬申の乱で活躍した將軍のひとりて渡来系氏族でもある文祢麻呂の墳墓である。現在、墳墓は史跡、墓誌などの出土品は国宝となっている。

古代末には、宇陀においても荘園の開発が急速に進み、坊ノ浦遺跡や高井遺跡では、掘立柱建物跡や素掘溝などを確認している。この頃から台頭してくる地武上団は、興福寺、春日社などの支配のもと各自が発展を続けた。この武士団は「宇陀三人衆」の秋山氏・澤氏・芳野氏に代表され、彼らは秋山城、澤城、芳野城をそれぞれの居城としていた。また、小規模な城館跡も各所に点在しており、城館の廃絶後、中世墓地と化したところもある。いわゆる中・近世墓地は、まともったところでは、大王山遺跡、能峠遺跡群、八咫鳥遺跡群、野山遺跡群などが発掘調査により明らかにされている。

紙幅の都合上、多くを述べることができないが、「位置と環境」は、以前からも他の報告書等に記載されており、次の文献が詳しい。

- 『宇陀・丹切古墳群』 奈良県教育委員会 1975
- 『大王山遺跡』 榛原町教育委員会 1977
- 『能峠遺跡群』Ⅰ 奈良県教育委員会 1986
- 『下井足遺跡群』 奈良県教育委員会 1987
- 『野山遺跡群』Ⅰ 奈良県教育委員会 1988
- 『高田垣内古墳群』 奈良県教育委員会 1991
- 『大和宇陀地域における古墳の研究』 宇陀古墳文化研究会 1993
- 『石榴垣内遺跡』 奈良県教育委員会 1997

Ⅲ 下城・馬場遺跡第10次発掘調査概要

1 調査の契機と経過

下城・馬場遺跡は奈良県宇陀郡榛原町大字沢に位置し、沢城跡から南方へ派生する尾根筋とその間を流れる小支流によって形成された小規模な谷地形の先端部の一角を占めている。古くから澤城の下城といわれ、現在も小字名に「下城」や「馬場」などといった呼称が残っている（図4）。

1984年度には「沢集落センター」建設に伴う発掘調査（1次調査）を行い、縄文時代～弥生時代、

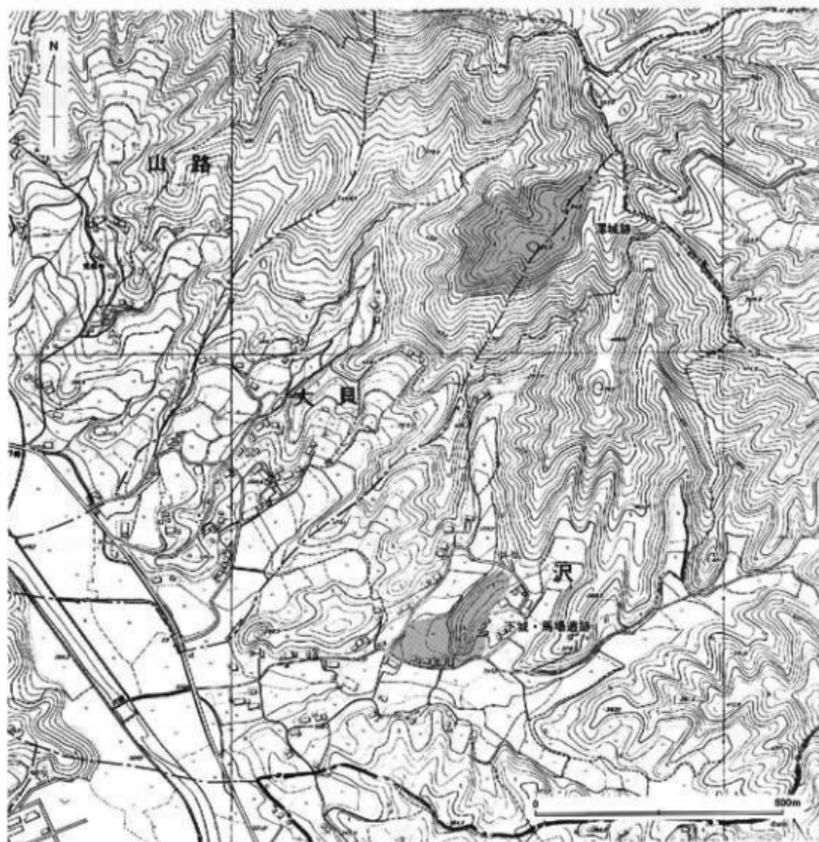


図4 下城・馬場遺跡位置図

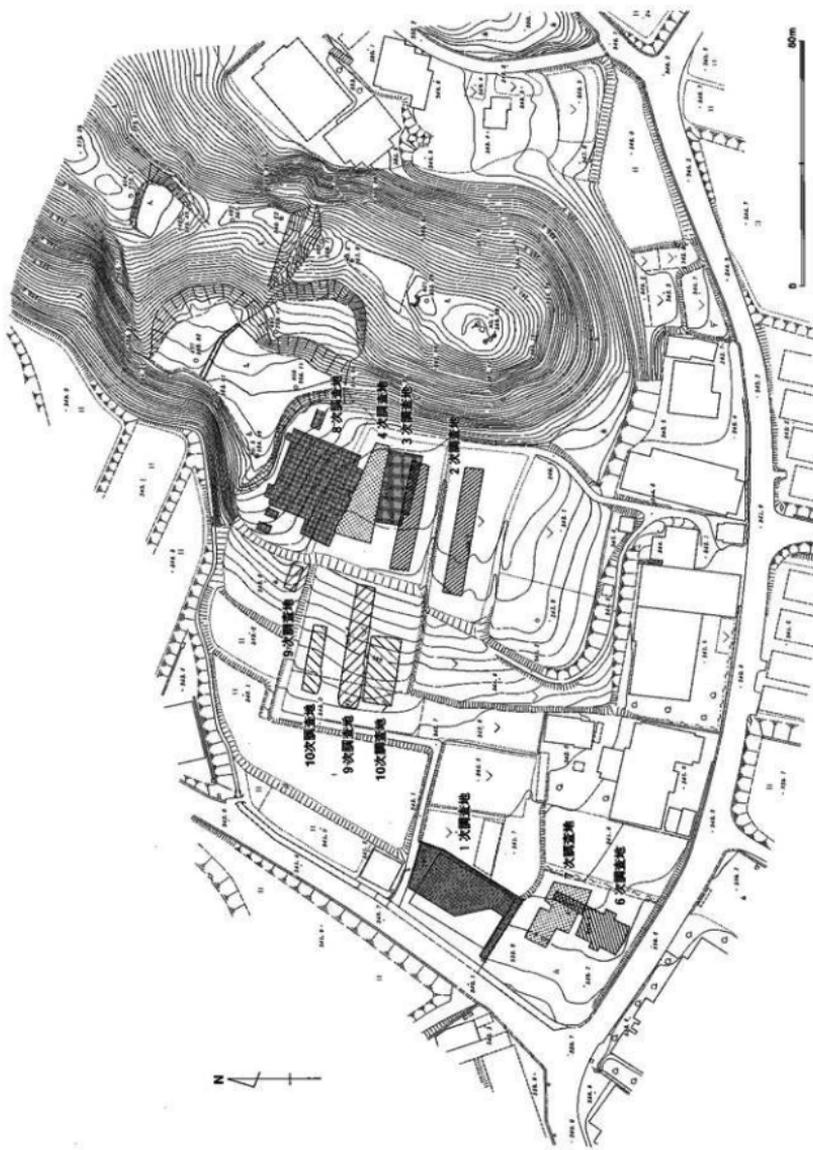


圖5 下城・馬場遺跡調查位置圖

中世（12世紀～13世紀）の遺構・遺物を検出している。その後、遺跡高所の平坦面において個人による土地改良工事が計画されたため、1993年度に2次調査、1994年度に3次調査、1997年度に4次調査を実施し、15世紀～16世紀の礎石建物等の遺構をはじめ、多くに遺物を検出し、中世の館跡の一端を明らかにできた（図5）。

これらの発掘調査によって、下城・馬場遺跡は、宇陀地域における有力中世武士団のひとりである「澤氏」の城館跡（居館跡）であることが明らかとなったことから、さらにその状況等を解明する範囲確認調査を計画し、1998年度に地形測量等（5次調査）、1999年度には、遺跡南西隅部分の遺構・遺物の状況を明らかにする6次調査を実施し、2000年度には、6次調査地の北隣において7次調査を継続し、あわせて東尾根の地形測量も行った。2001年度には、2～4次調査地北側の遺構の有無などを明らかにすることを目的とした確認調査（8次調査）を実施した。

2003年5月～12月には、個人の農地改良工事に伴う発掘調査（9次調査）を実施し、遺跡斜面の状況の一部が明らかとなり、さらに2004年7月12日～2005年3月29日まで断続的に発掘調査を継続（10次調査）した。

北側の9次調査地においては、多量の瓦器椀、土師皿等が出土しており、2006年度においてその範囲を拡張し調査を継続中である（11次調査、図6、図版6）。

2 位置と環境

下城・馬場遺跡は、尾根稜線から西斜面、標高約339m～370mの一角を占めており、芳野川が流れる西方への眺望が比較的良好で、遠く、宇陀地域の代表的な中世山城である秋山城跡を望むことができる。

また、北方には沢城跡や伊那佐山を仰ぎ見ることができる。下城・馬場遺跡の中心は尾根の西斜面に広がり、4段にわたる平坦面が形成されている。遺跡の現状は大半が畑地や水田、山林、周縁部は宅地となっている。

この遺跡の周辺は縄文時代～中世の沢遺跡、弥生時代～中世の延命寺遺跡、古墳時代前期の戸石・辰巳前遺跡や古墳時代前期～後期の野山古墳群などの遺跡が集中している地域でもある。

3 遺跡の調査

今回の発掘調査では、9次調査と同様、多くの遺物を含む整地土と堀、土塁の一部を検出している（図6、図版1～5）。

上段の居館焼失に伴う片付けによって、土砂、遺物などを西斜面へ投棄している状況が窺えた。これが結果的に整地土となっており、地形の傾斜によった斜めの堆積状況を示している（図7、図版4・5）。

その後、幅約5～6m、深さ1.5m以上の堀を造っている。この堀は、現在の土地形状に比較的一致し、南北方向に埋没しているものと推定される。

トレンチ調査のため、幅が限られ、また、整地土も深くなることが予想されたため、下層の遺構面の状況等を明らかにできていない。出土遺物から整地作業は14世紀前葉以降、堀の造営は14世紀中葉

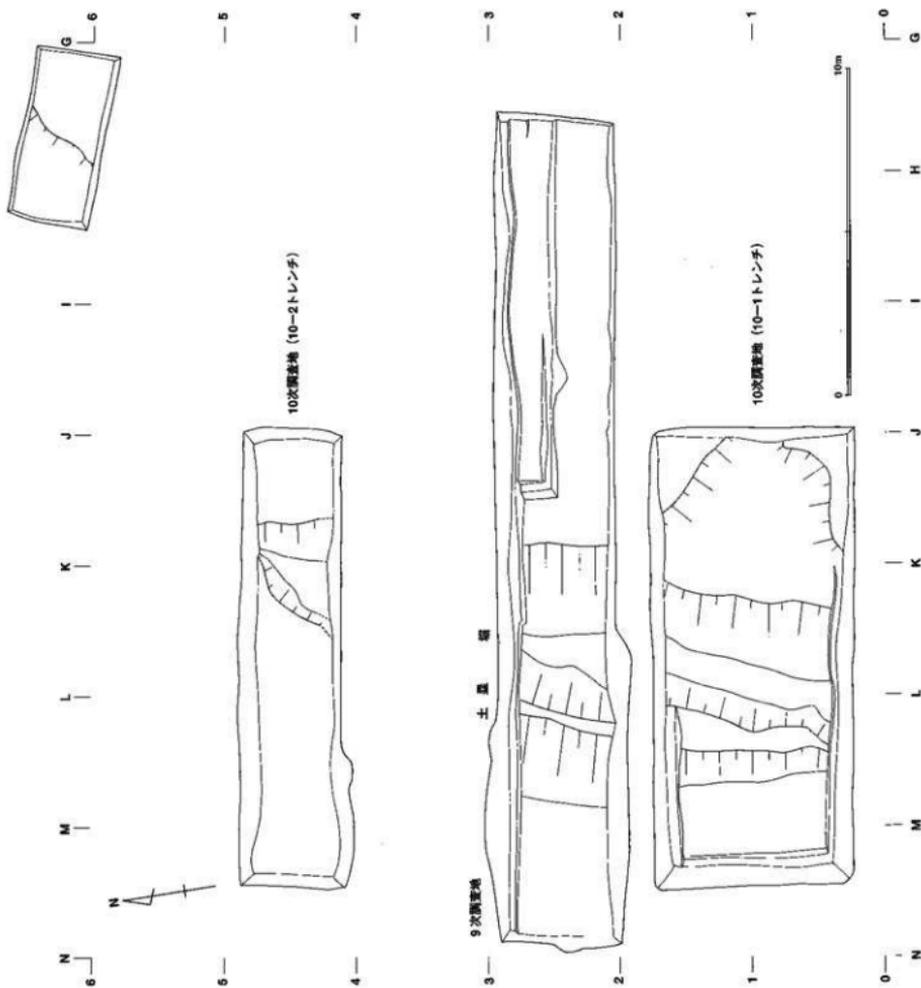
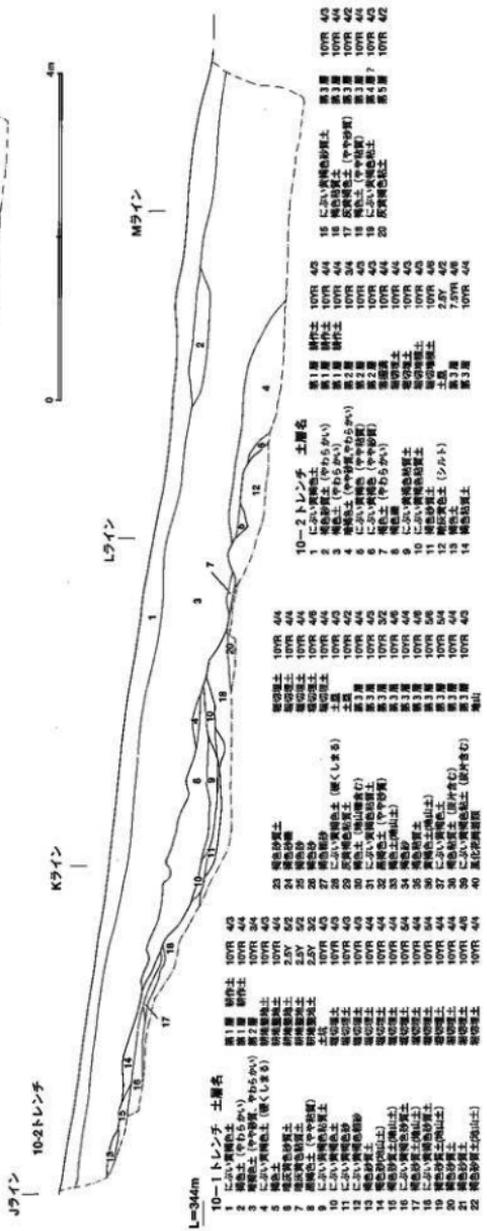
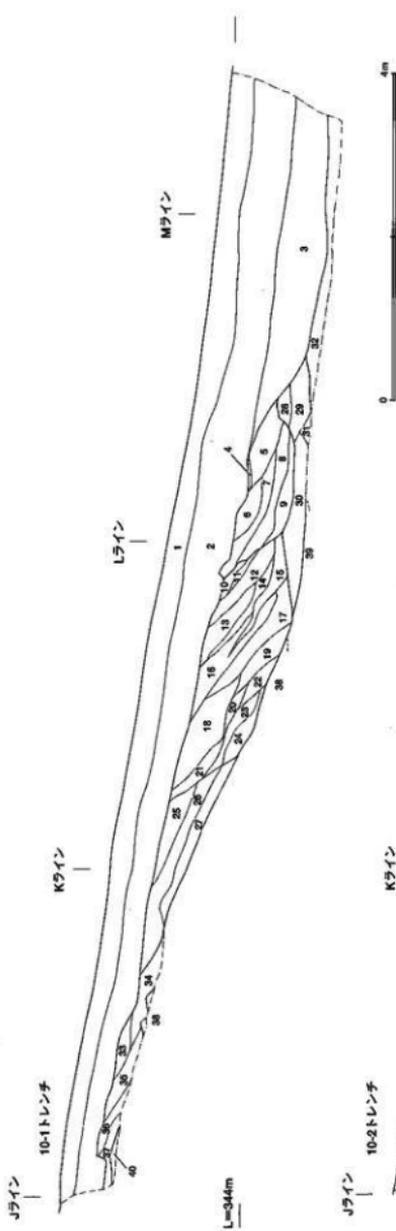


図6 下城・馬場遺跡(9・10次)遺構平面図



10-1トレンチ 土層名

1	細かい黄褐色土	10TR 43
2	細砂土 (やや砂質)	10TR 44
3	細砂土 (やや砂質)	10TR 44
4	細かい黄褐色土 (やや砂質)	10TR 45
5	細砂土 (やや砂質)	10TR 45
6	細かい黄褐色土 (やや砂質)	10TR 46
7	細砂土 (やや砂質)	10TR 46
8	細かい黄褐色土 (やや砂質)	10TR 47
9	細砂土 (やや砂質)	10TR 47
10	細かい黄褐色土 (やや砂質)	10TR 48
11	細砂土 (やや砂質)	10TR 48
12	細かい黄褐色土 (やや砂質)	10TR 49
13	細砂土 (やや砂質)	10TR 49
14	細かい黄褐色土 (やや砂質)	10TR 50
15	細砂土 (やや砂質)	10TR 50
16	細かい黄褐色土 (やや砂質)	10TR 51
17	細砂土 (やや砂質)	10TR 51
18	細かい黄褐色土 (やや砂質)	10TR 52
19	細砂土 (やや砂質)	10TR 52
20	細かい黄褐色土 (やや砂質)	10TR 53
21	細砂土 (やや砂質)	10TR 53
22	細かい黄褐色土 (やや砂質)	10TR 54

10-2トレンチ 土層名

1	細かい黄褐色土	10TR 45
2	細砂土 (やや砂質)	10TR 46
3	細砂土 (やや砂質)	10TR 46
4	細かい黄褐色土 (やや砂質)	10TR 47
5	細砂土 (やや砂質)	10TR 47
6	細かい黄褐色土 (やや砂質)	10TR 48
7	細砂土 (やや砂質)	10TR 48
8	細かい黄褐色土 (やや砂質)	10TR 49
9	細砂土 (やや砂質)	10TR 49
10	細かい黄褐色土 (やや砂質)	10TR 50
11	細砂土 (やや砂質)	10TR 50
12	細かい黄褐色土 (やや砂質)	10TR 51
13	細砂土 (やや砂質)	10TR 51
14	細かい黄褐色土 (やや砂質)	10TR 52
15	細砂土 (やや砂質)	10TR 52
16	細かい黄褐色土 (やや砂質)	10TR 53
17	細砂土 (やや砂質)	10TR 53
18	細かい黄褐色土 (やや砂質)	10TR 54
19	細砂土 (やや砂質)	10TR 54
20	細かい黄褐色土 (やや砂質)	10TR 55
21	細砂土 (やや砂質)	10TR 55
22	細かい黄褐色土 (やや砂質)	10TR 56

図7 下城・馬場遺跡 (10次) 土層断面図

以降、堀の埋没（埋め立て）は16世紀後葉頃と推定される。

4 ま と め

9次調査の整地土中からは、多くの遺物が出土し、下層遺構面の可能性がある土層の相違も認められたところではあるが、10次調査においては、整地土面（遺構面）の深さ、堀・土塁の状況を確認することに主眼をおいたため、整地土を深く掘り下げてはいない。堀内には、いっきに山土（地山土）が入れられ、埋められたことが確認できた。堀の埋没（埋め立て）は16世紀後葉頃と推定され、これが澤氏の居館の終焉とも考えられる。

5 抄 録

遺 跡 名	下城・馬場遺跡 <奈良県遺跡地図番号15-D-90>
調 査 地	奈良県宇陀郡榛原町大字沢1296番地（現 奈良県宇陀市榛原区沢1296番地）
遺 跡 立 地	標高約339m～370mの尾根稜線・斜面、谷部分
遺 跡 規 模	南北：約200m、東西：約200m
種 別	縄文時代・弥生時代・古墳時代・中世の遺物散布地、中世の居館跡
調 査 主 体	榛原町教育委員会（現 宇陀市教育委員会）
調 査 担 当 者	榛原町教育委員会 生涯学習課（現 宇陀市教育委員会 社会教育課） 主任 柳澤一宏
調 査 原 因	個人の農地造成工事 <事業主体：砥出嘉信>
現地調査期間	2004（平成16）年7月12日～12月28日 2005（平成17）年3月12日～3月29日
調 査 面 積	131㎡
検 出 遺 構	堀、土塁、整地土
検 出 遺 物	サヌカイト、縄文土器、須恵器、土師器、瓦器、瓦質土器、陶器、磁器、青磁、白磁、鉄釘、鉄滓、砥石、銭貨、瓦、壁土他 <整理箱 9箱>
資料等の保管	宇陀市教育委員会
調査後の措置	埋め戻し、一部工事実施（遺構に影響がない範囲において、一部工事実施）

IV 丹切遺跡第11次発掘調査概要

1 調査の契機と経過

丹切遺跡は、縄文時代から中世にいたる遺物散布地で、奈良県遺跡地図番号15-B-8、榛原町遺跡地図番号1-98として登録しているところである。遺跡北東部の住宅地内において、個人住宅の新築工事が計画され、2004年9月には埋蔵文化財発掘届が提出された。関係機関等が遺跡の取扱い・発掘調査の実施方法等を協議した結果、榛原町教育委員会において調査を担当することとなった。

現地調査は、2004（平成16）年11月4日に実施した。なお、丹切遺跡の発掘調査は、今次で第11次調査となる（図9）。

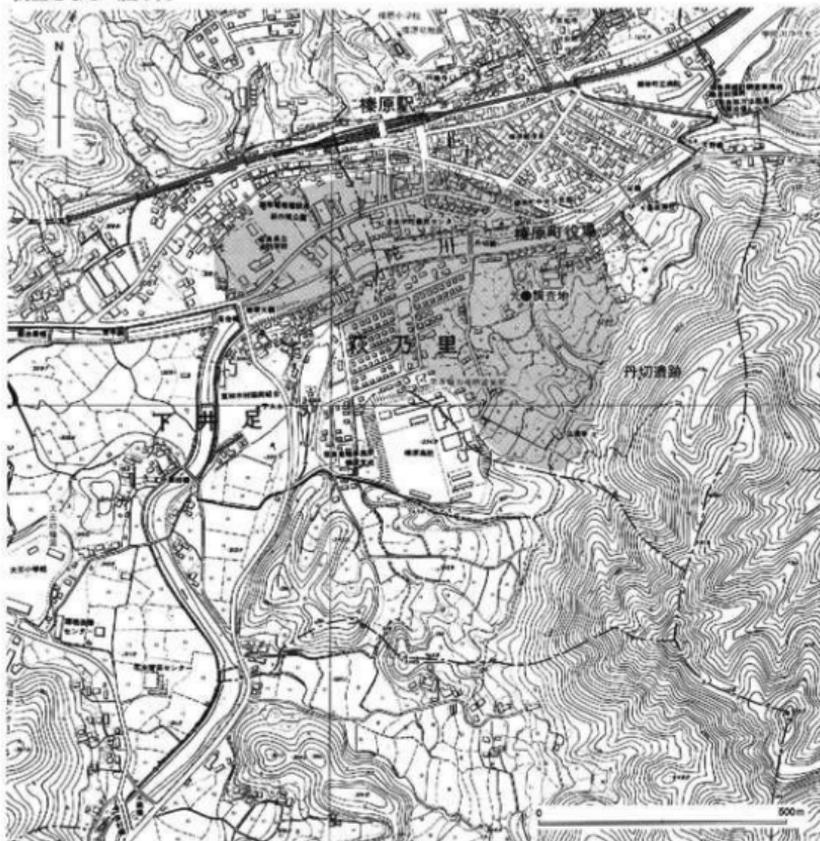


図8 丹切遺跡位置図



図9 丹切遺跡調査位置図

2 位置と環境

丹切遺跡は、榛原の市街地の南端部にあたり、丹切古墳群から宇陀川へと緩やかに北へ傾斜する谷水田地帯から旧宇陀川右岸の河岸段丘上に位置する。調査地は、遺跡の北東部、北西に開く谷地形の下流部分（標高約319m）にあり、谷背後の尾根上には丹切古墳群が位置する（図8）。

3 遺跡の調査

(1) 調査区と基本層序

工事予定地（面積：約293m²）のうち、建物建設地の南端部分にトレンチ（長さ約7m、幅約1m）を設定し、遺構・遺物の検出につとめた（図10、図版7）。

基本層序は、第1層の耕作土（にぶい黄褐色土）下は風化花崗岩類の地山で、地表から地山面までの深さは、約15cmである（図11）。

(2) 検出遺構

調査地は尾根西斜面にあたり、後世の畑地のため大きくその斜面が掘削されており、明確な遺構は

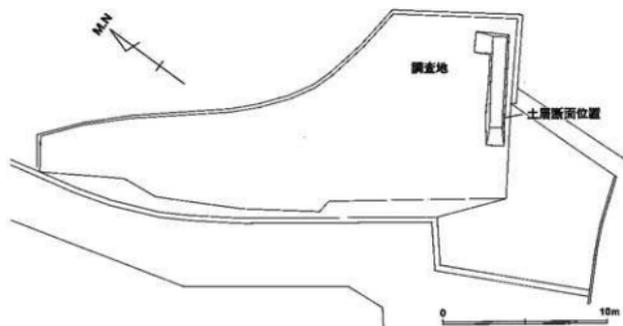


図10 丹切遺跡（11次）調査位置図

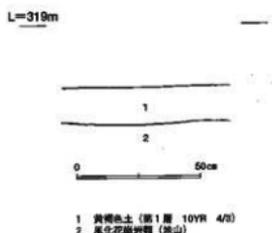


図11 丹切遺跡（11次）土層断面図

認められない。

(3) 出土遺物

明確な遺物は認められない。

4 ま と め

丹切古墳群から宇陀川へと向かう谷地形は、いくつかあったと考えられ、今回の調査地もその一つである。後世の変更が著しい尾根西斜面の一部を調査したのみで、明確な遺構・遺物は認められなかった。中世には谷は埋没し、現地形に近い景観を呈するようになったと考えられる。上方の谷部分や尾根周辺に遺構・遺物が埋蔵されている可能性が高いが、今後の調査等に期するところが大きい。

5 抄 録

遺 跡 名	丹切遺跡 <奈良県遺跡地図番号15-B-8>
調 査 地	奈良県宇陀郡榛原町大字萩原 元萩原442、450番地（現 奈良県宇陀市榛原区萩原 元萩原442、450番地）
遺 跡 立 地	標高約307～360mの谷部・河岸段丘・低地
遺 跡 規 模	南北約700～800m、東西約300～400m
種 別	縄文時代～中世の遺物散布地
調 査 主 体	榛原町教育委員会（現 宇陀市教育委員会）
調 査 担 当 者	榛原町教育委員会 生涯学習課（現 宇陀市教育委員会 社会教育課） 主任 柳澤一宏
調 査 原 因	個人住宅建設工事 <事業者：日高 崇>
現 地 調 査 期 間	2004（平成16）年11月4日
調 査 面 積	8㎡
検 出 遺 構	なし
検 出 遺 物	なし
資 料 等 の 保 管	宇陀市教育委員会
調 査 後 の 措 置	明確な遺構が認められないため、工事実施

V 松牧市場西垣内遺跡第2次発掘調査概要

1 調査の契機と経過

松牧市場西垣内遺跡は、弥生時代から古墳時代、中世の遺物散布地で、奈良県遺跡地図番号15-B-555、榛原町遺跡地図番号2-626として登録しているところである。1998年の発掘調査（1次調査）では、自然流路を検出し、古式土師器が出土している（図13）。

この1次調査地の東方（上流）約50mの住宅地内において、個人住宅の新築工事が計画され、2004年8月には埋蔵文化財発掘届が提出された。関係機関等が遺跡の取扱い・発掘調査の実施方法を協

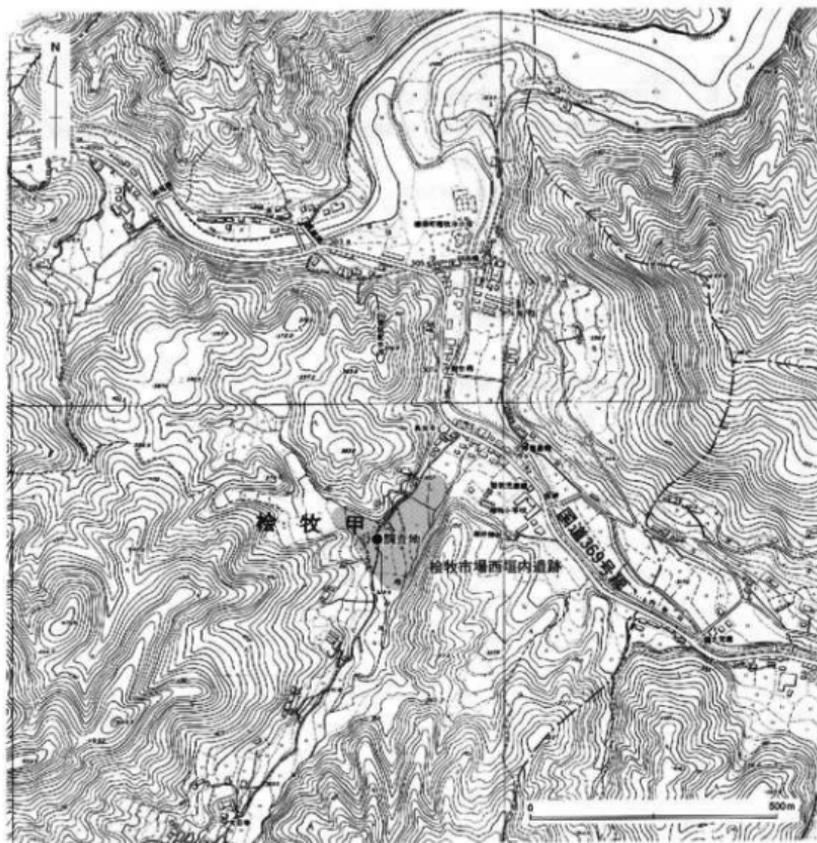


図12 松牧市場西垣内遺跡位置図

議した結果、榛原町教育委員会において調査を担当することとなり、現地調査を2004年12月21日、2004年12月27日に実施した。

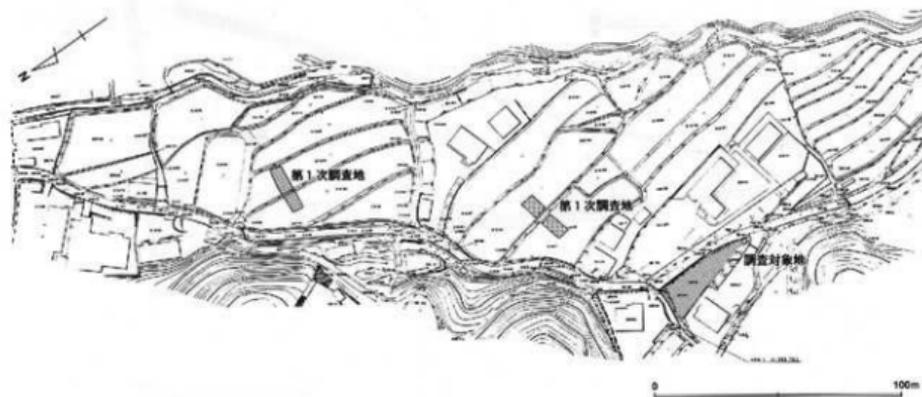


図13 検牧市場西垣内遺跡調査位置図

2 位置と環境

桜牧市場西垣内遺跡は、榛原の市街地から北東約2kmに位置し、当地の主要河川のひとつである内牧川へと流ぐ西谷川下流域に広がる(図12)。

遺跡下方の西谷川と内牧川との合流付近には、式内社の御井神社が鎮座し、「市場」といった呼称も残っている。内牧川に沿う国道369号線は、大和と伊勢とを結ぶ「伊勢本街道」でもある。

3 遺跡の調査

(1) 調査区と基本層序

工事予定地(面積:約277㎡)のうち、建物建設地の中央部分にトレンチ(長さ約5m、幅約1.5m)を設定し、遺構・遺物の検出につとめた(図14)。

基本層序は、第1層が水田耕作土(灰黄色粘土)、第2層が水田床土(暗灰黄色粘質土)、第3層が

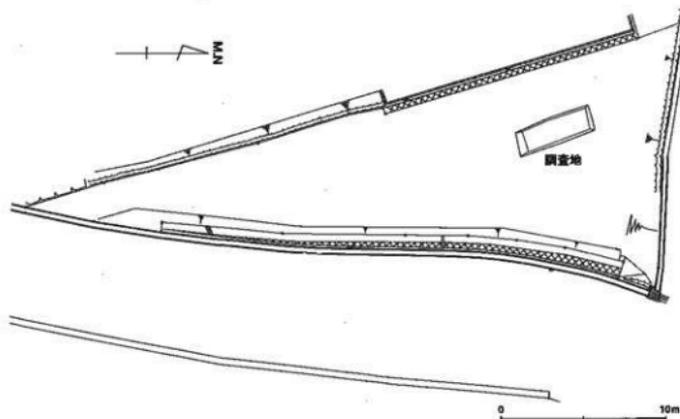


図14 桜牧市場西垣内遺跡(2次)調査位置図

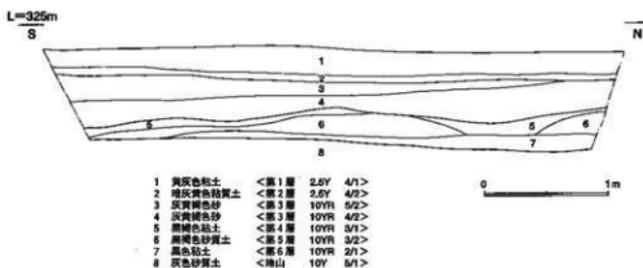


図15 桜牧市場西垣内遺跡(2次)土層断面図

灰黄褐色砂、第4層が黒褐色粘土、第5層が黒褐色砂質土、第6層が黒色粘土、第7層が灰色砂質土の地山となっている（図15、図版8）。

(2) 検出遺構

第4層～第6層において遺物、地山面において遺構の検出につとめたが、明確な遺構は認められない。

(3) 出土遺物

明確な遺物は認められない。

4 ま と め

地山面において遺構の検出につとめたが、これを明確には検出できなかった。1次の調査成果から本調査地周辺には古墳時代前期（4世紀後葉）の遺構の存在を推定しているところではあるが、今回は、これを明らかにすることができなかった。

5 抄 録

遺 跡 名	<small>ツノまきいし ばにしがいと</small> 検牧市場西垣内遺跡 <奈良県遺跡地図番号15-B-555>
調 査 地	奈良県宇陀郡榛原町大字検牧2384番地（現 奈良県宇陀市榛原区検牧2384番地）
遺 跡 立 地	標高約313～340mの谷部
遺 跡 規 模	南北約250m、東西約300m
種 別	弥生時代～古墳時代、中世の遺物散布地
調 査 主 体	榛原町教育委員会（現 宇陀市教育委員会）
調 査 担 当 者	榛原町教育委員会 生涯学習課（現 宇陀市教育委員会 社会教育課） 主任 柳澤一宏
調 査 原 因	個人住宅建設工事 <事業者：伊藤芳浩>
現地調査期間	2004（平成16）年12月21日、12月27日
調 査 面 積	7㎡
検 出 遺 構	なし
検 出 遺 物	なし
資料等の保管	宇陀市教育委員会
調査後の措置	明確な遺構が認められないため、工事実施

VI 澤城跡第2次発掘調査概要

1 調査の契機と経過

澤城跡は、中世の宇陀を代表する澤氏の居城といわれ、以前から、宇陀を代表する中世山城のひとつとして注目されてきた(図版9)。

近年は、澤城跡を含む山林の荒廃が進行しつつあり、澤城の保存と活用が望まれてきた。この城跡の保存と活用をはかる資料の作成等が課題となり、2001年度には、城跡の地形測量、崩壊箇所の緊急調査(1次調査)を実施したところである(図17)。

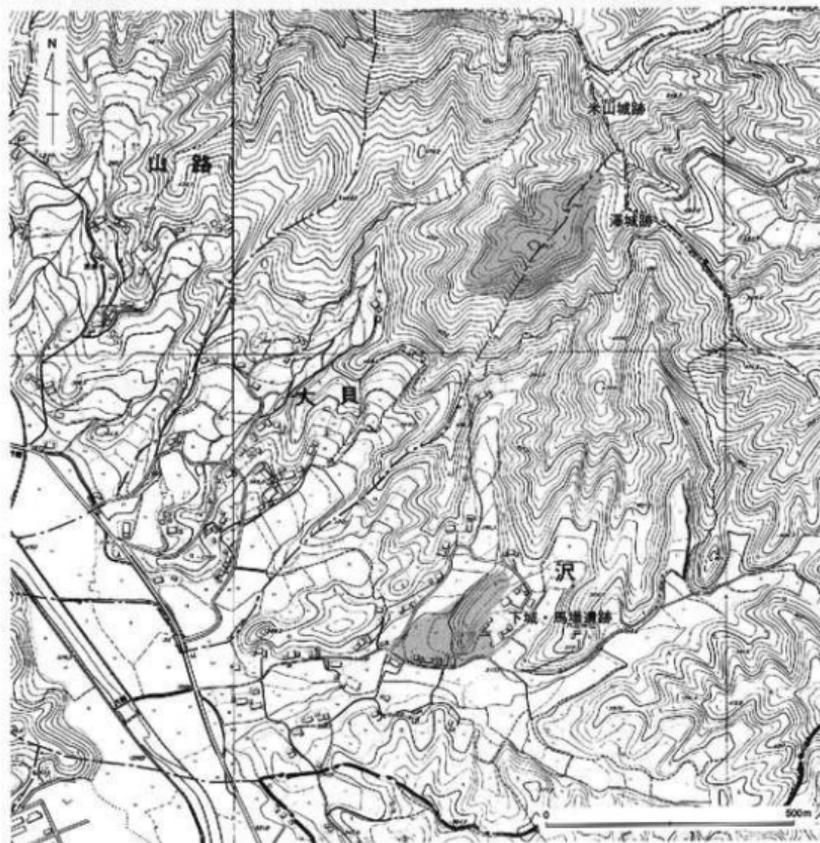


図 16 澤城跡位置図

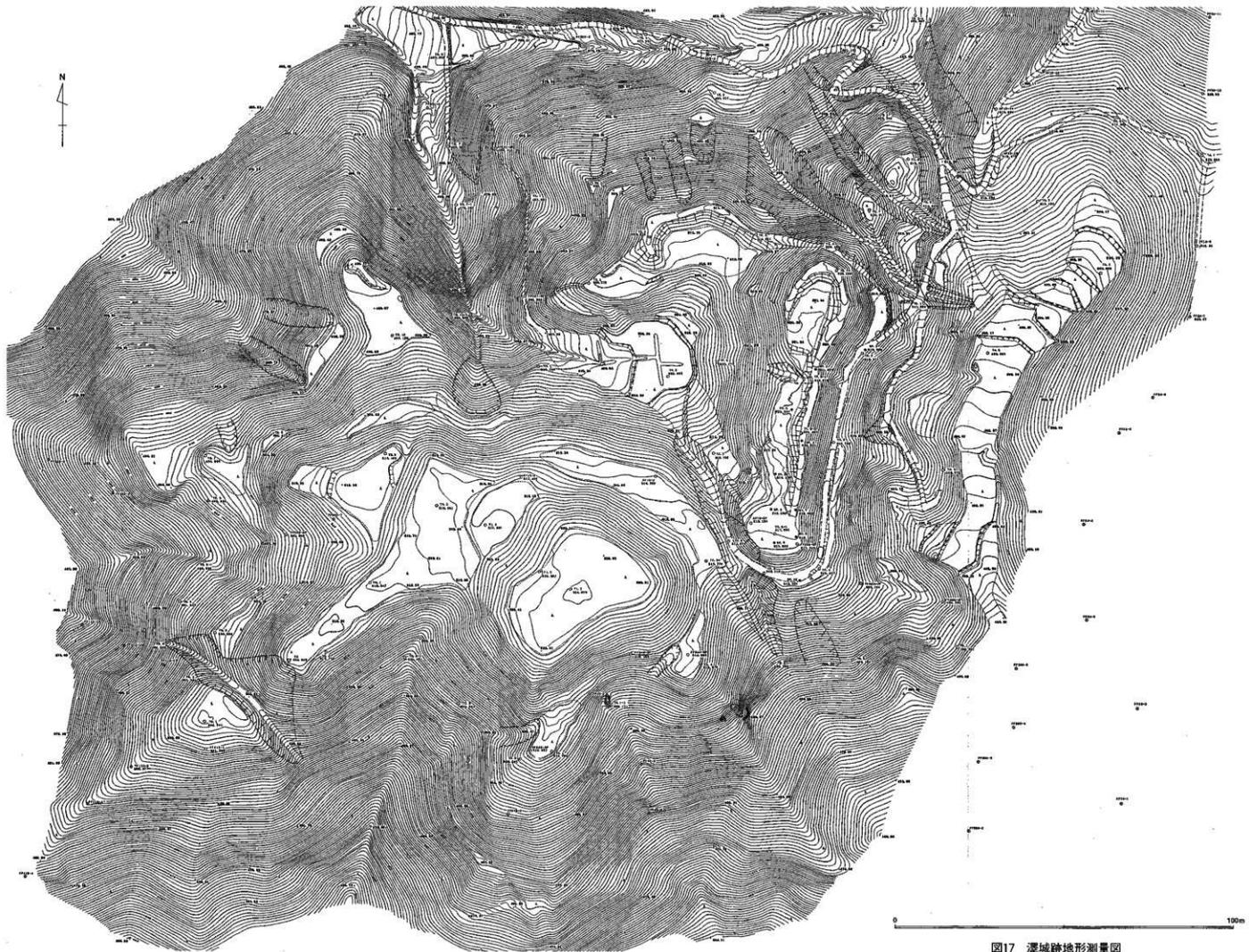


圖17 渾城跡地形測量圖

今年度から遺構の有無等を確認する確認調査を実施することとなり、関係機関・関係者の協議によって諸条件が整った地区の現地調査を行なっている。

現地調査は、2004年（平成16年）3月10日に着手し、2005年（平成17年）8月10日まで、断続的に実施した。

2 位置と環境

伊那佐山から南東にのびる標高約538mの山頂に造られた中世山城である。城山と呼ばれている山中には、平坦面・土塁・掘切りなどの遺構が良好な状態で残っている。城は、本丸に相当する主郭群（西郭群）、出丸に相当する副郭群（東郭群）で構成され、南斜面には小規模な郭と考えられる平坦面もある。この城の築造時期は明らかでないが、天正13年（1585）年頃に廃城となっている。永祿3年（1560）には、高山飛騨守図書が城主となり、幼少の高山右近もここで過ごし、右近は、この城内の教会で洗礼を受けている。北東には、米山城と呼ばれる郭群、南方の城下（沢・大貝）には居館や小規模な郭群が築かれ、広義の澤城の範囲に含めることができる（図16）。

澤城は、伊那佐山から南東にのびる尾根を切った二重堀切から大手口をおさえる郭群までの南北約

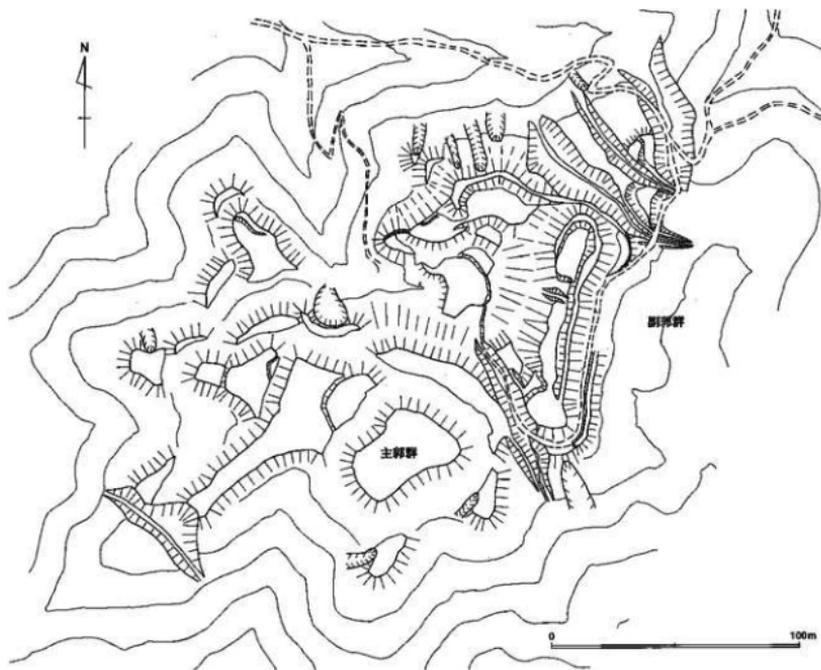


図18 澤城跡縄張り図



圖19 渾城跡(2次)調査位置圖(1)

700m、東西約400mに及ぶ広大なもので、東西両端を堀切で遮断された東西約300mの郭群が澤城の主要部分となっている（図18）。

主要部分の東西には、深い堀切があり、東端は三重の堀切となっている。また、主要部分の中程にも堀切が認められ、これを境として東西に郭群をわけることができ、西郭群は本丸、二ノ丸等、東郭群は出丸、クラカケバ等と呼称されている郭がある。以下、通称名も併用する。

西郭群は、最高所にある東西約40m、南北約20～30mのやや不整な長方形を呈する主郭（本丸）を中心に展開している。北西と北東には、細長い郭がめぐり、主郭（本丸）と北西郭（二の丸）との斜面は緩傾斜となっている。西郭群は基本的には、土塁が築かれていないが、主郭（本丸）から北へとのびる尾根先端に形成された郭の北端には、小規模な土塁が認められる。

東郭群の中心は、南北約90m、東西約20mの細長い郭（出丸）を中心としており、西側以外の三方を土塁で囲み、東から南にかけて、通路状になった帯郭が廻る。細長い出丸の中程には、小規模な堀切が認められ、南郭と北郭とに分かれる。

3 遺跡の調査

(1) 調査区と基本層序

主郭西方の一段低くなっている平坦面と更に西へ伸びる平坦面を今回の調査対象とした(図19・20)。平成15・16年度からの継続調査で、その概要は次のとおりである。

(2) 検出遺構

第1地点（図21～24、図版9・10）

平坦面北西角に設定したところ、礎石7石とその抜き取り穴と思われる土坑を検出している。調査

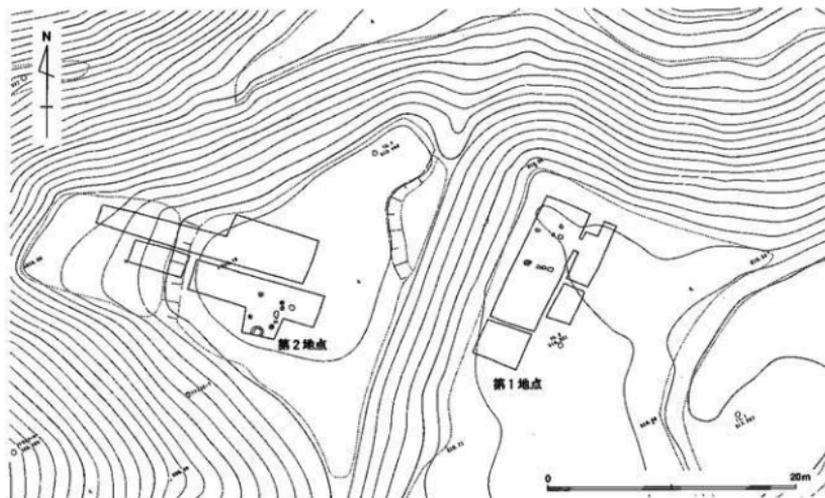


図20 澤城跡（2次）調査位置図（2）

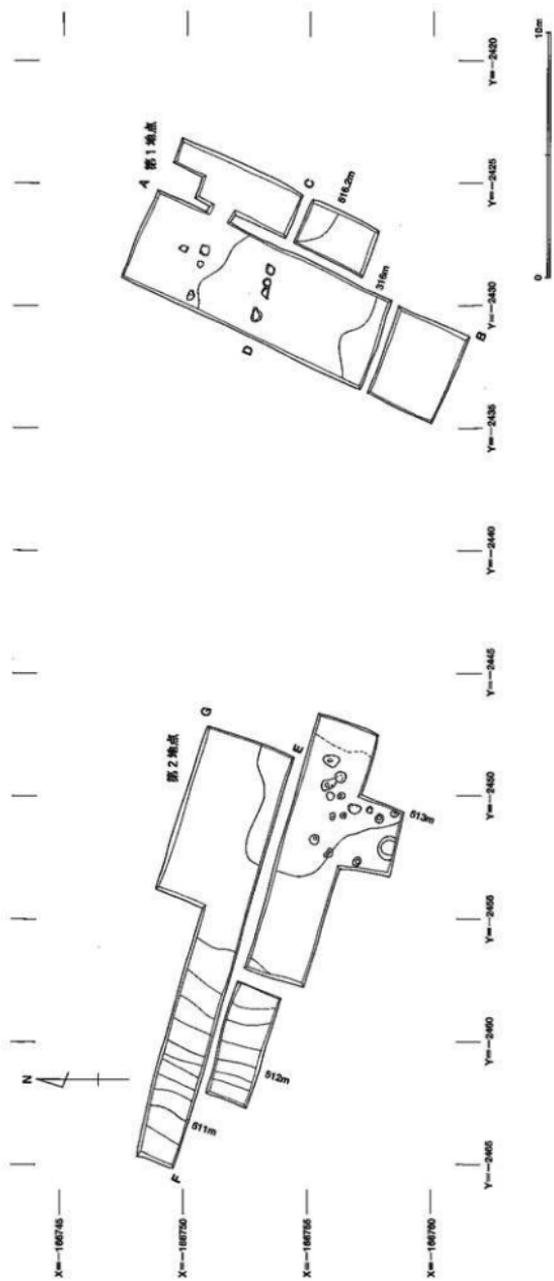


図21 湊城跡(2次)遺構測量図
(アルファベットは図22に対応)

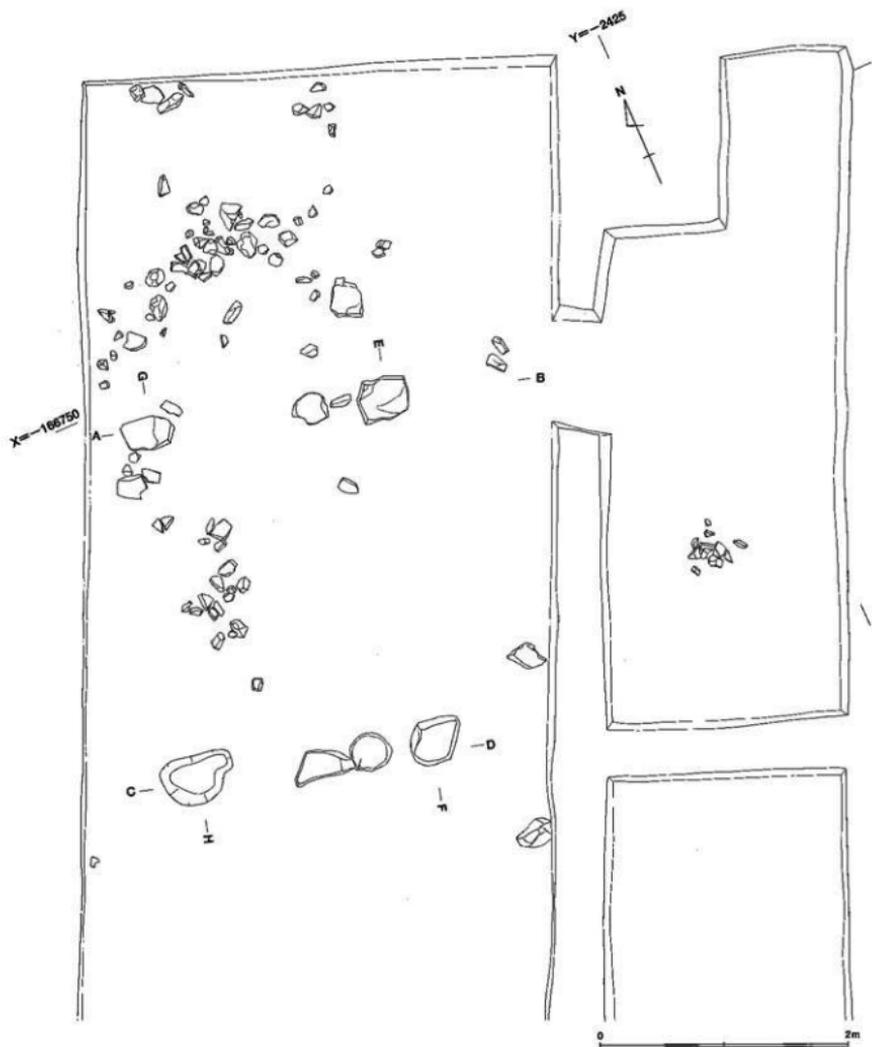


図23 澤城跡（2次）第1地点遺構平面図
 （アルファベットは図24に対応）

範囲が限られているため、具体的な礎石建物の配置は明らかにできないが、検出した礎石建物は南北約2.9m、東西約2.0m（1.5間×1間）の規模を有する。

検出遺構面（第1遺構面）を保護するために、下層の掘り下げは最小限とし、現段階では土層観察にとどめているが、第1遺構面を構成する整地土下にはさらに遺構面の存在が推定できる。

第2地点（図21・22・25～27、図版11・12）

第2層除去後、第1遺構面を検出し、平坦面南東隅において礎石2石、土坑、ピット等を確認している。調査範囲が限られているため、具体的な礎石建物の配置は明らかにできない。なお、ピットのうち、一部においては、掘立柱建物となる可能性があるものも認められ、検出している限りにおいては、1間×1間（2m×2m）の規模をはかる。

第1遺構面を構成する整地土は深く、下層遺構の有無は明らかにできない。

（3）出土遺物

整理途中ではあるが、昨年度の調査分を含めてサヌカイト、土師器、瓦質土器、陶器、磁器、青磁、白磁、犬形土製品、瓦、鉄刀子、鉄釘、鉄滓、銅製目貫金具、銅製金具、銭貨、ガラス、ガラス滓、砥石、陶片転用砥石、軽石、壁土等が出土している。細片が多いものの、16世紀第3四半期の範疇で捉えることができるものである。これらの詳細は、後日、別途、報告することとしたい。

これらの遺物のなかに陶片転用砥石6点と砥石（筋砥石）1点（表5、写真1～4）とがある。いずれも第1地点からの出土である。これらの砥石には、幅10mm程度の凹溝があり、その溝内には、研いだ痕跡が認められる。この種の砥石（筋砥石）は、榛原区検牧・自明所在の坊ノ浦遺跡からも出土（図28）しているところであるが、現段階では、多くの類例を見ることができない。この砥石の用途としては、鉛玉（鉄砲玉）用の砥石とも推定されているところである。^(註1)

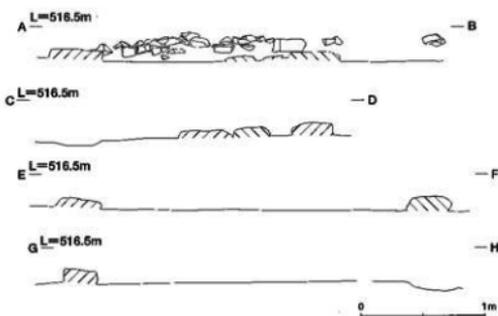


図24 澤城跡（2次）第1地点遺構断面図

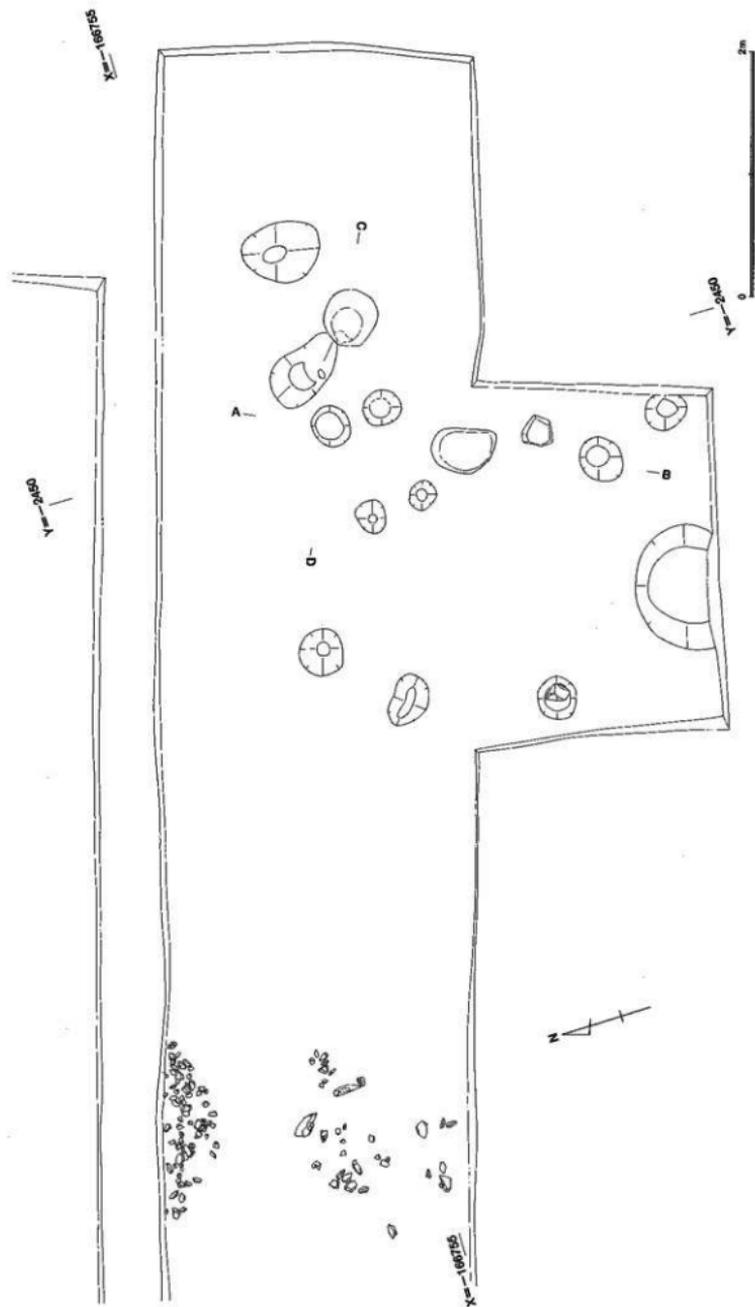


図25 澤城跡（2次）第2地点遺構平面図
（アルファベットは図26に対応）

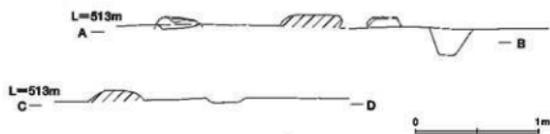


图26 潭城跡（2次）第2地点遺構断面図

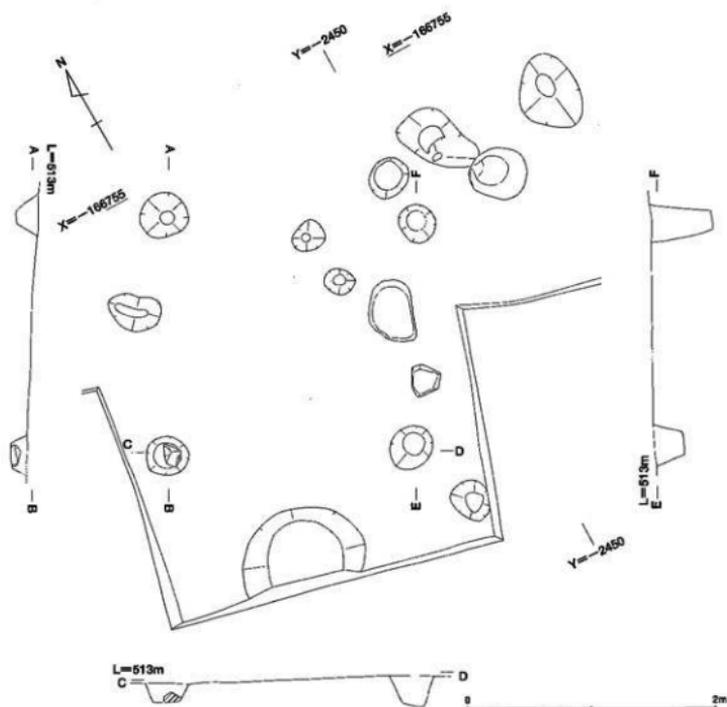


图27 潭城跡（2次）第2地点土坑群実測図

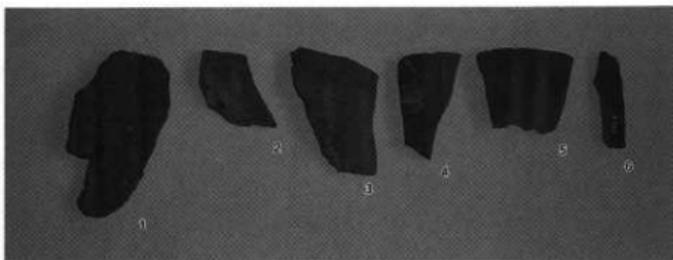


写真1 陶片転用砥石（外面）

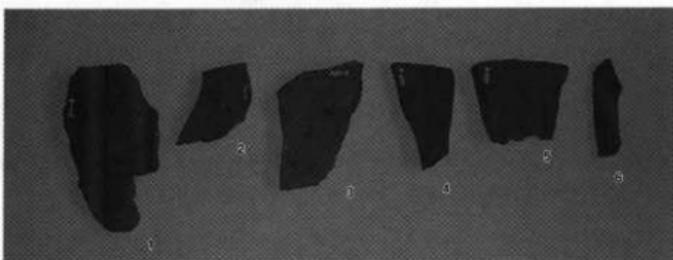


写真2 陶片転用砥石（内面）



写真3 砥石（A面）



写真4 砥石（B面）

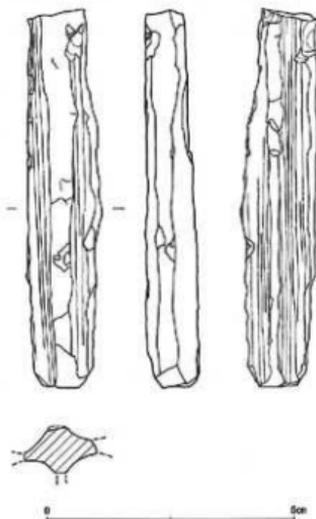


図28 紡ノ浦遺跡出土 砥石実測図

表5 澤城跡(第1地点)出土 磁石計測表

写真番号	材質	磁石本体(現存)			溝(現存)			
		長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)	面	条数	幅(cm)	深さ(cm)
1-1	陶器	8.2	4.8	1.4	外面	2	1.0~1.1	0.5
2-1					内面	2	1.1~1.2	0.5
1-2	陶器	3.7	3.9	1.0	外面	3	0.7~0.8	0.3
2-2					内面	-	-	-
1-3	陶器	6.3	4.3	1.0	外面	2	0.9~1.0	0.2~0.3
2-3					内面	-	-	-
1-4	陶器	5.3	3.1	0.8~0.9	外面	2	0.7~1.0	0.4
2-4					内面	-	-	-
1-5	陶器	4.2	4.9	1.1	外面	2	0.8~1.0	0.4
2-5					内面	2	0.7~0.8	0.3
1-6	陶器	5.0	1.5	1.0	外面	1	-	0.4
2-6					内面	2	1.0	0.3
3	石	3.1	1.5	1.0	A面	1	-	0.5
4					B面	1	-	0.3

4 まとめ

第1地点において、具体的な様相は明らかにできないものの、礎石建物を検出することができ、出土遺物からその時期は、16世紀第3四半期頃のものとして推定できる。詳細は、今後の調査に期待するところが大きいが、第1遺構面は高山氏、下層遺構は澤氏のそれぞれの時期の可能性が高い。

5 抄 録

遺跡名	澤城跡 <奈良県遺跡地図番号15-D-79>
調査地	奈良県宇陀郡榛原町大字大貝302、303番地
遺跡立地	標高約400m~560mの尾根上、主要部分は標高約480m~524mの尾根上
遺跡規模	南北約700m、東西約400m、主要部分は南北約250m、東西約300m
種別	中世の城跡
調査主体	榛原町教育委員会(現 宇陀市教育委員会)
調査担当者	榛原町教育委員会 生涯学習課(現 宇陀市教育委員会 社会教育課) 主任 柳澤一宏
調査原因	範囲確認調査 <事業主体:榛原町教育委員会(現 宇陀市教育委員会)>
調査期間	2004(平成16)年3月10日~2004(平成16)年3月31日 2005(平成17)年8月1日~2005(平成17)年8月10日
調査面積	154㎡
検出遺構	礎石建物、集石、土坑、ピット
検出遺物	サヌカイト、土師器、瓦質土器、陶器、磁器、青磁、白磁、犬形土製品、瓦、鉄刀子、鉄釘、鉄滓、銅製目貫金具、銅製金具、銭貨、ガラス、ガラス滓、磁石、陶片 転用磁石、軽石、壁土他 <整理箱 4箱>
資料等の保管	宇陀市教育委員会
調査後の措置	保存(埋め戻し)

註1) 河内一浩 1999「根来の玉つくり—根来寺出土の陶片転用磁石の解釈をめぐって—」【紀伊通信】第26号

版 圖



航空写真（西上空から）



航空写真（西上空から）



9次調査地（西から）



9次調査地土層断面（南西から）



10次調査地（西から）



10-1 トレンチ整地土（第3層）検出状況（西から）



10-1 トレンチ (西から)



10-1 トレンチ土層断面 (南から)



10-2 トレンチ (西から)



10-2 トレンチ土層断面 (北西から)



11次調査地整地土〈第3層〉検出状況（西から）



11次調査地整地土〈第3層〉内遺物検出状況（西から）



航空写真 (1992年撮影)



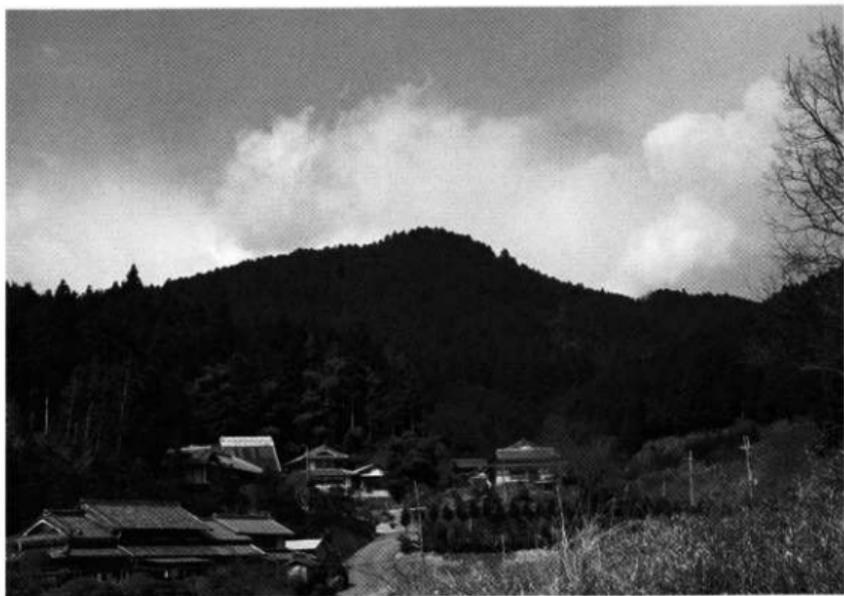
調査地 (北から)



調査前 (南から)



調査地 (南東から)



澤城跡遠景（南から）



第1地点検出遺構（南から）



第1地点検出遺構（北から）



第1地点検出遺構（東から）



第2地点（東から）



第2地点（西から）



第2地点検出遺構（西から）



第2地点検出遺構（北から）

報告書抄録

ふりがな	はいばらちょうないせいせきはつつちようさがいようほうこくしょ							
書名	榎原町内遺跡発掘調査概要報告書 2004年度							
副書名								
巻次								
シリーズ名	榎原町文化財調査概要							
シリーズ番号	29							
編著者名	榊澤一宏							
編集機関	宇陀市教育委員会							
所在地	〒633-0292 奈良県宇陀市榎原区下井足17番地の3 Ⅱ 0745-82-5739(代)							
発行年月日	西暦 2006年 3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因	
所収遺跡名	所在地(旧名)	市町村	遺跡番号	上段:世界測地系 下段:日本測地系				
下城・馬場遺跡 (10次調査)	奈良県宇陀郡榎原町 大字沢1296番地	29383		34度 29分 33秒	135度 58分 07秒	2004.7.12 ～ 2004.12.28 2005.3.12 ～ 2005.3.29	131	個人農地 改良工事
丹切遺跡 (11次調査)	奈良県宇陀郡榎原町 大字萩原 元萩原442、450番地	29383		34度 31分 36秒	135度 57分 28秒	2004.11.4	8	個人住宅 建設工事
松牧市場西垣内遺跡 (2次調査)	奈良県宇陀郡榎原町 大字松牧2384番地	29383		34度 31分 19秒	135度 58分 20秒	2004.12.21 2004.12.27	7	個人住宅 建設工事
澤城跡 (2次調査)	奈良県宇陀郡榎原町 大字大貝302、303番地	29383		34度 29分 59秒	135度 58分 14秒	2004.3.10 ～ 2004.3.31 2005.8.1 ～ 2005.8.10	154	範囲確認 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
下城・馬場遺跡 (10次調査)	遺物散布地 城館跡	縄文～古墳、中世 中世	堀、土塁、塹地 土	サヌカイト、縄文土器、須恵器、土師器、瓦器、瓦葺土器、陶器、磁器、青磁、青磁、白磁、鉄釘、鉄棒、鉄洋、銅製百寶金具、銅製金具、銭貨、ガラス、ガラス洋、磁石、陶片転用磁石、軽石、炭土他				
丹切遺跡 (11次調査)	遺物散布地	縄文～中世	なし	なし				
松牧市場西垣内遺跡 (2次調査)	遺物散布地	弥生～古墳、中世	なし	なし				
澤城跡 (2次調査)	城跡	中世	礎石建物、集石、土坑、ピット	サヌカイト、土師器、瓦葺土器、陶器、磁器、青磁、白磁、犬形土製品、瓦、鉄刀下、鉄釘、鉄棒、銅製百寶金具、銅製金具、銭貨、ガラス、ガラス洋、磁石、陶片転用磁石、軽石、炭土他				

榛原町内遺跡発掘調査概要報告書 2004年度

榛原町文化財調査概要 29

2006年3月31日

発行 宇陀市教育委員会
編集 奈良県宇陀市榛原区下井足17番地の3

印刷 株式会社明新社
奈良市南京街3丁目4番地